シイタケ栽培実態調査

はじめに

昭和62～63年度に県下一斉にシイタケ栽培実態調査を実施し、アンケート用紙を回収・分析しました。その回収率には地区毎にバラツキがありましたが、総数は県きのこ振興会会員数の約1／3でした。

以下にその概略を示しますが、便宜上県内を下伊那（75戸）、上伊那・諏訪（32戸）、木曽・松本・北安曇（36戸）、長野・上田（39戸）の4地区に分けて、主要な項目について説明します。

1. 種菌の使用状況

これまでの栽培の経過もあり、県下全般に森種菌を使用している割合が高いが、ヤクルト・富士種菌といった新しいメーカーのものを使用している栽培者が、若年層を中心に上伊那・諏訪・北安曇地区に目立つ。また、下伊那地区では森121、明治908などの低温系の種菌がほとんどです。なお、使用状況の割合は使用量の多少があるので直接植菌本数には結びつきません。（図―1）

2. 原木入手

下伊那地区では、地域の森林状況・経営内容を反映して原木自給率が高い。立木購入の目立つ地区もあるが、やはり業者・森林組合からの個人購入の割合が高く、年々良質原木の入手に苦慮している点がうかがわれました。（図―2）

3. 年植菌本数

下伊那地区では、乾シイタケ複合経営が多いため4,000本未満の割合が高く、シイタケ栽培としては小規模者が多いことがわかる。一方、上伊那・松本・北安曇・長野地区では若年層の中に、毎年12,000本以上植菌して大規模経営を目指している栽培者もいる。（図―3）

4. 生乾生産量

下伊那地区では乾200kg未満の栽培者が多く、生では若年層で周年栽培を目指す人が若干出てきている。他地区での乾生産は生の補完的性質が強い。（図―4）

5. 年生産額

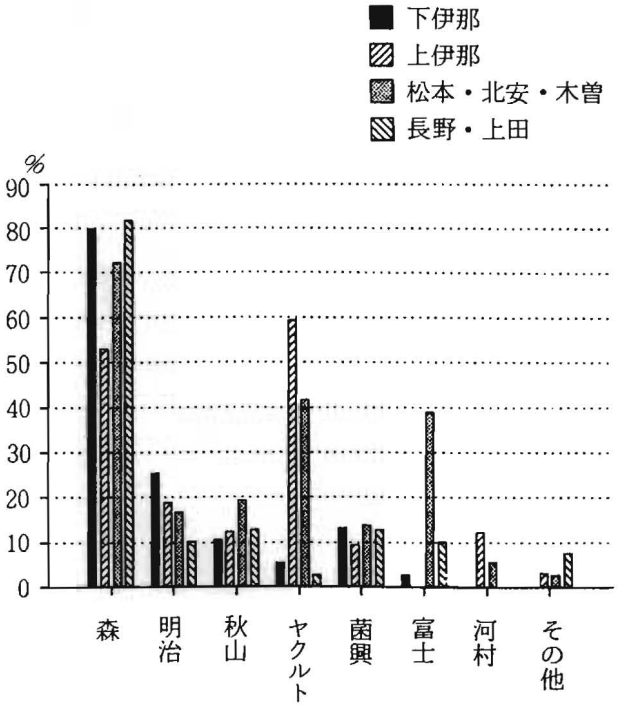
年植菌本数・生乾生産量にほぼ比例した年生産額となっており、400万円未満の栽培者が約半数でした。しかし、長野・上田地区で200万円と600万円に2つピークがあることは、年植菌本数・生乾生産量からみて、経営状態に良否が出ていることがうかがわれる。個々の栽培内容についてみても、植菌本数が多い割に効率よく回転されておらず、生産量・生産額の伸びがないケースが県下で目につきました。栽培環境、経営立地から見た適正規模の把握が重要であることが再認識された。（図―5）

6. 栽培年数

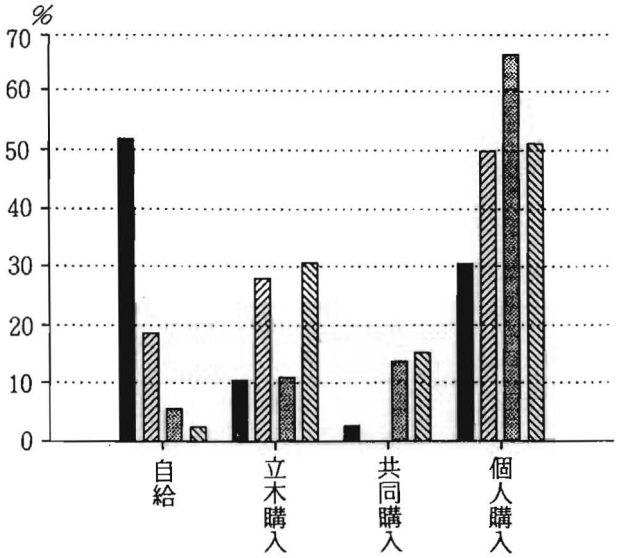
上伊那・諏訪地区では10年未満の経験年数の浅い栽培者が目立つ。松本・北安曇地区では10～20年の中堅栽培者が目立つ。（図―6）

7. 後継者の有無、経営規模の意向

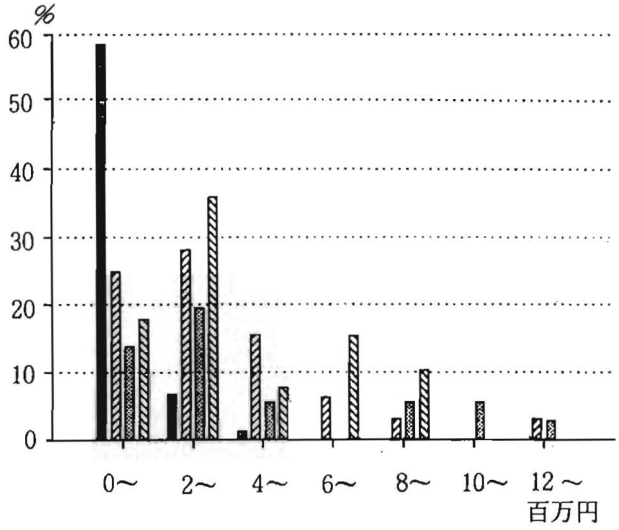
下伊那地区では後継者がなく経営規模縮小を考えている栽培者が目についた。やはり県下全般で多くを占めているのは、後継者がなく経営規模現状維持と考えている栽培者です。しかし、先にも触れたように若年層の中には、積極的に規模拡大を目指している栽培者もいるので、適切に指導していく必要があります。



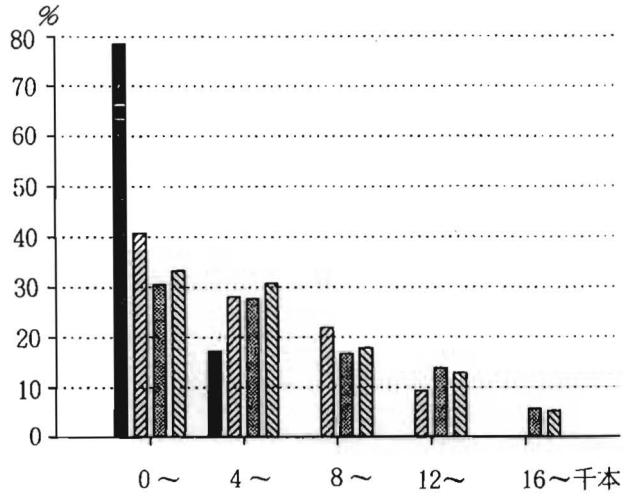
図―1　種菌の使用状況



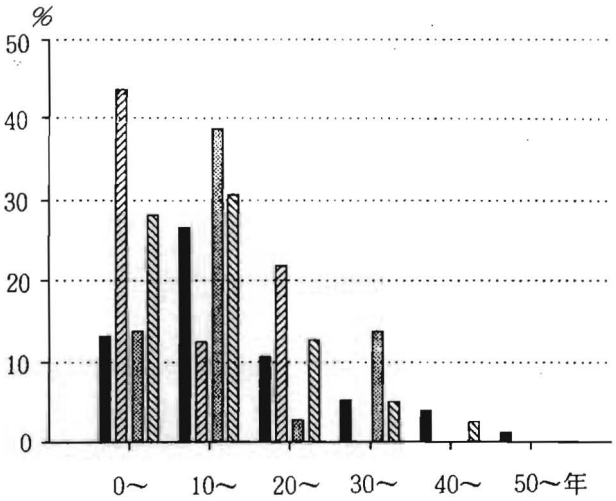
図―2　原木入手



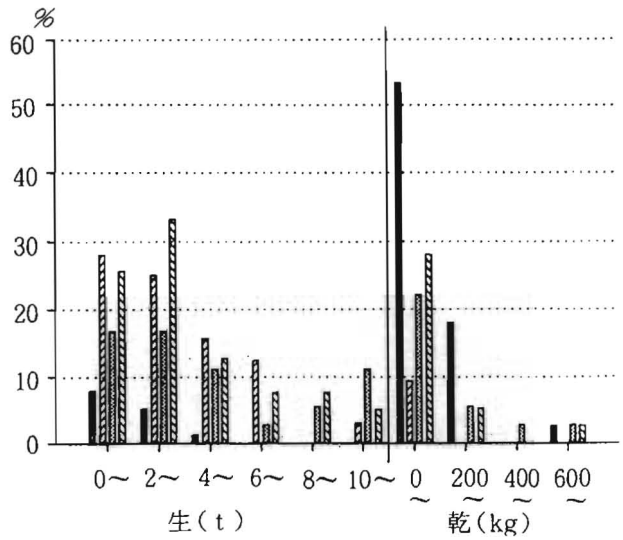
図―5　年生産額



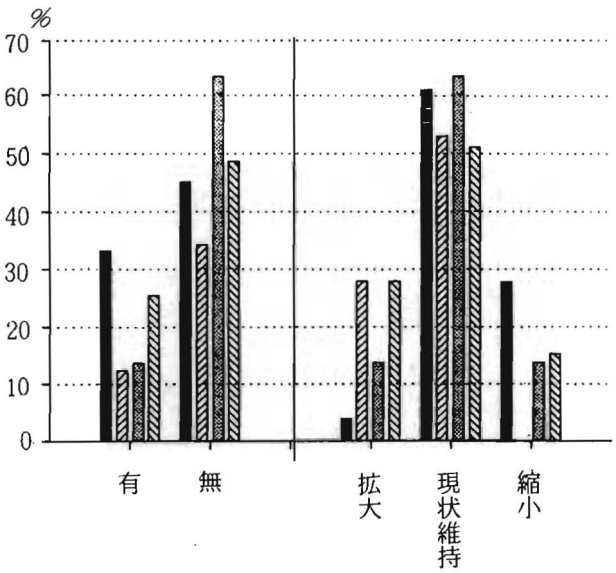
図―3　年植菌本数



図―6　栽培年数



図―4　生乾生産量



図―7　後継者の有無・経営規模の意向

ま と め

今回の調査は各地区ＡＧの方々の御協力のもと実施しましたが、パソコンでデータ分類・検索する都合上アンケートの内容が多少複雑多岐にわたり、記入しにくく充分に回答されていない用紙もみられたので、今後は簡便に改良する余地があるように思われました。また、各地区でのアンケートの取り方にも差があり、各栽培者に郵送回収したもの、会合の席上で一同に回答してもらったもの、現地で栽培者に聞き取りを行ったもの、机上で記録をもとにまとめたものなど様々のようでした。そのため、同じデータでも内容の重みに差があり、栽培者の生の声を反映しているものから、客観的立場で表現されているものなど色々でした。

ここでは県下を４地区に分け、ある程度大きな視点で数ポイントに焦点をあてて考察しましたが、さらに良質のデータが数多く集計できれば、普及・行政・研究の多方面で役立つ資料となり、県下の状況からみた各栽培者の経営診断も可能となるでしょう。また、今回は各出先機関にもあるPanasonic Operate 8000 の既製プログラムを利用したので、データ入力には少々手間がかかりますが、その後の分類・検索等は簡単なため、データバンクとしてさらに充実させればフロッピーを交換するだけで各地区でＡＧの方々が普及・指導・情報交換に有効に活用できるものになると考えられます。

（特産部　　竹内）